記念講演「日本の行方を考える」

明石康元国連事務次長

PKO、教育…限界露呈

世界では、貿易や投資活動、通信、科学技術など、国境を越えての経済や文化的な動きが激しくなってきた。

世界人口の半分が貧困にあえぐ中、グローバル化はいろんな国の生活水準を上げ、経済活動を活発化させるという意味で、人類全体の幸福に役立つと考えてよいだろう。

そうした中で、気にかかることがある。日本の経済力は米国に次ぎ世界二位でありながら、国連平和維持活動（PKO）への参加度は八十二番目と貢献度は非常に低い。現在、イスラエルとシリア国境のゴラン高原に約三十人の自衛隊員が活動しているだけ。国連活動の大半が行われているアフリカには一人も出していない。隣国の中国は積極的に協力しており、恥ずかしい状況にある。

日本では貧困にあえぐ人はさほどおらず、個人的にやりたいことができる。犯罪も少なく安全でもある。わざわざPKOに参加し、苦労や危険に身をさらす必要がないとの考えが増えているようにも思える。

スイス・チューリヒ近くのサンガレン大が主催する国際会議がある。世界中から有数の財界人や政治家、学者らが集まる。聴講生として世界の大学や大学院の学生二百人以上が招かれるが、七、八年前の会議に私が出たとき、日本の学生は一人だけだった。中国とインドは約三十人ずつ参加していた。各方面の呼び掛けにより、日本からの学生は今年二十一人に増えたが、そのうち日本人は八人で、他は外国人留学生だった。

最近の若者は社会や経済、外交などの基礎的知識のないケースが目立ってきた。新聞さえ、きちんと読む人は少ない。国際的な場で、存在感を失いつつあるのでは、と危ぐしている。

問題の一つが、大学・大学院教育のあり方だろう。日本ではあまり勉強せず、のんびりエンジョイする学生が多い。しかし、発展途上国の学生はガツガツと臨んでいる。米国など先進国も含め、各国が若者の能力・知力を競い合っているのに、次代を担う若者の高等教育がこれで良いのか、と首をかしげざるを得ない。

さまざまな面で今までのやり方では限界がきており、強みである経済面でもアジア各国に追い越される懸念がある。長期的にどういう国づくりをするのか、真剣に考える

あかし・やすし　1957年国連入りし、事務次長などを経て97年退職。その後、広島平和研究所長などを歴任した。2007年4月から公設国際貢献大学校長。東京大教養学部卒。バージニア大大学院修了。77歳。